

研究課題	G-PDCA サイクルを活用できる中学生の育成
副題	～タブレット端末における My Consul の作成を通して～
キーワード	G-PDCA サイクル、ポートフォリオ (My Consul)、成長プレゼン・インタビュー
学校/団体名	私立郡山ザベリオ学園中学校
所在地	〒963-0201 福島県郡山市大槻町字古屋敷 102 番地
ホームページ	http://www.xaverio.ed.jp/

1. 研究の背景

(1) 昨年度の研究から

昨年度より本校では、全国学力学習実態調査や定期テストの結果を分析し「学力差」に着目し、研究を進めてきた。本校で実施した生徒へのアンケートから、学力差と学習意欲には相関関係があることがわかった。また、学習動機に関するアンケートから、外発的動機づけの生徒が多く、学ぶ目的や生徒自身の目指す目的を設定する機会が少なかったと考えた。

(2) これまでの ICT 活用から

行事や総合的な学習の時間では、タブレットを用いてプレゼンテーションを行ったり、理科の授業では実験を動画や写真に撮り、結果を他の班と比較したりするなど ICT を活用してきた。しかし、教員や生徒が調べものや発表用として ICT を使用することが目的となり、「本来、何のために発表するのか」「何のために振り返りを行うのか」などの目的意識が失われていた。

(3) 振り返りの蓄積から

行事等の振り返りににおいて紙媒体を用いることで、その場限りとなってしまう、年間を通しての学びや気づきにつながっていないことや、振り返りを確認するのが担任に固定してしまい、教員間で生徒の変容が共有できないことなどが課題となった。

2. 研究の目的

予測不可能な社会になりつつある今、学校に与えられた使命とは「他者に貢献しようとし、自己共に幸せに生きることができる大人へと導くこと」であると考えます。そのために本校では、生徒全員に「自己実現」(＝なりたい自分像を持ち、それを実現する力)を身に付けさせたいと考えた。生徒には、授業や行事などあらゆる場面で、G: 目的やゴール (目的設定) ⇒ P: 計画 (意識・行動・目標などの決定) → D: 行動 (計画に基づく実践) → C: 評価 (過程と成果の振り返り) → A: 改善 (次に向けた見直し) のサイクル (図 1) を経験させたい。また、その繰り返しを通して、中学校卒業時に「G-PDCA サイクルを獲得し、その先の社会でも自己実現を追求できる生徒」を育成したい。本研

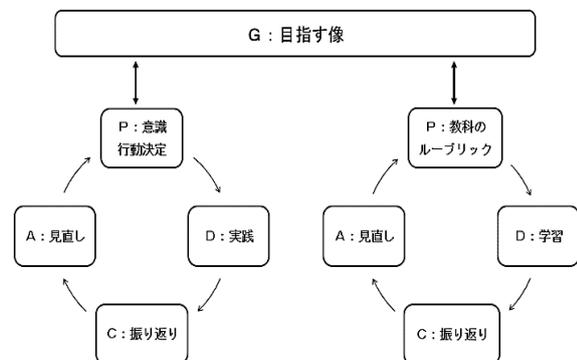


図 1 本校 G-PDCA サイクルのイメージ

究では、その達成に向けた視点として「タブレット端末の活用」をあげる。紙媒体よりも多様な記録の収集・蓄積が可能であり、教員・保護者・生徒間など幅広くフィードバックを受けることが可能になるタブレット端末は、生徒全員のG-PDCAサイクルの獲得の助けとなると考える。以上のことから、本研究では、生徒一人ひとりがG-PDCAサイクルを獲得するための実践を通して、その過程におけるタブレット端末の有用性を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の経過

本研究では、研究担当教員による研究全体会と外部講師による校内研修で教員研修を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により取り組み内容を変更した(表1)。また、同様に生徒に対しての外部講師の公演中止や校外学習の取り止め、時期の変更などを行い、研究を行った。

表1 当初の取り組み内容と実際の経過

時期	計画での取り組み内容	実際の取り組み内容	評価のための記録
R1 3月	校内研修 (My Consultの活用について講師を招く)		
R2 4月	①研究全体会(活動計画の提示) ②生徒への講演(My Consult作成に向けて) ③校外学習(タブレット端末での蓄積)		
5月	生徒の自己評価や振り返り(1回目)	①研究全体会(活動計画の提示) ②生徒へのオンライン説明 (My Consult作成に向けて)	
6月	研究全体会 (4、5月のMy Consult活用の振り返りと検討)		
7月		生徒の自己評価や振り返り(1回目)	生徒アンケート ・学習動機 ・ループリッック表
9月	①校内研修 (成長プレゼン・インタビューについて講師を招く) ③校外学習(タブレット端末での蓄積)		
10月		校外学習 (リアルタイムな情報の蓄積)	タブレット端末での 写真等の蓄積
12月 ~ 1月	①生徒の自己評価や振り返り(2回目) ②成長プレゼン・インタビュー用資料の作成 ③成長プレゼン・インタビューの実施	①生徒の自己評価や振り返り(2回目) ②成長プレゼン・インタビュー用資料の作成 ③成長プレゼン・インタビューの実施	①生徒アンケート ・学習動機 ・ループリッック表 ・G-PDCAサイクル ②My Consultの活用 ③保護者アンケート
2月 ~ 3月	①研究全体会 (My Consult活用の振り返りと検討) (研究授業の成果と課題の報告) (一人一台タブレット端末導入に向けて) ②校内研修 (教科ループリッック作成について講師を招く)	研究全体会 (My Consult活用の振り返りと検討) (研究授業の成果と課題の報告) (一人一台タブレット端末導入に向けて)	アンケート結果 ・生徒アンケート ・保護者アンケート ・授業レポート ・教員アンケート
通年	全教員による研究授業の実施 (G-PDCAサイクルを意識した授業の取り組み)	全教員による研究授業の実施 (G-PDCAサイクルを意識した授業の取り組み)	授業レポートの作成

4. 代表的な実践

本研究の実践について、以下の3点をあげる。

(1) 生徒の実態を教員が把握するための実践

本研究の背景や目的は、これまでの生徒へのアンケート結果から生まれている。アンケート結果を分析することで、現状を把握でき、生徒の実情に沿ったテーマ設定ができる。

そこで、本研究で生徒に実施したアンケートは、以下の3つである。

①ルーブリック表を用いた自己評価アンケート

本校で作成した学校ルーブリック表(表2)を用いて、生徒自身が振り返りを年2回行った。

②将来の夢と学習動機づけに関するアンケート

「将来の夢が決まっている」「行きたい大学が決まっている」「行きたい高校が決まっている」

「まだ決まっていない」の項目ごとに、学習に対する動機づけを調査した。学習動機づけは、西村(2011)を参考に内発的動機づけ(内的調整)と外発的動機づけ(同一化的調整、取り入的調整、外的調整)での項目を作成し、年2回行った。

③G-PDCA サイクルに関するアンケート

G-PDCA サイクルへの理解度を確かめるためにアンケートを行った。また、あわせてプレゼン型面談(以下、成長プレゼン・インタビュー)の振り返りとタブレット端末の活用の有用性についての質問項目も付け足した。

(2) G-PDCA サイクル獲得のための実践

生徒がG-PDCA サイクルを獲得するため、成長プレゼン・インタビューに取り組んだ。「なりたい自分像」(G:目的やゴール)を定め、行事や授業ごとに「達成のための計画」(P:意識・行動・目標)を立てた。「行事や授業などでの取り組み」(D:計画に基づく実践)を紙媒体とClassi(ICT活用を支援するクラウドサービス)を用いて「振り返り」(C:過程と成果の振り返り)を行い、次の活動につなげるための「改善」(A:次に向けた見直し)に取り組んだ。活動記録や振り返りは、紙媒体はBox(図2)、Classiはタブレット端末ですべて蓄積した(以下、BoxとClassiをあわせてMy Consul)。My Consulを用いて、生徒一人ひとりがパワーポイントに自身の「なりたい自分像」を振り返っての成果と課題をまとめた。まとめたパワーポイントは、保護者と教員の前での成長プレゼンに用いる(図3)。成長プレゼン後は、その場で保護者と教員からプレゼン内容についてインタビューやアドバイスを受け、今後の課題の解決につなげる。この実践で、生徒の成長を保護者と共に共有することができた。

(3) タブレット端末の有用性を確認するための実践

(1)のアンケートはすべて自動で集計されるClassiのアンケート機能を活用し、全生徒がタブレット端末で回答し、全教員がタブレット端末上で共有できるようにした。また、校外学習でもリアルタイムな情報を蓄積するためにタブレット端末を持ち出し活動した(図4)。

表2 学校ルーブリック表

項目	評価基準	評価基準	評価基準	評価基準	評価基準
目標設定	具体的な目標を設定し、達成に向けて努力している。	具体的な目標を設定し、達成に向けて努力している。	具体的な目標を設定し、達成に向けて努力している。	具体的な目標を設定し、達成に向けて努力している。	具体的な目標を設定し、達成に向けて努力している。
計画立案	達成のための計画を立て、実行している。	達成のための計画を立て、実行している。	達成のための計画を立て、実行している。	達成のための計画を立て、実行している。	達成のための計画を立て、実行している。
振り返り	達成した目標や課題を振り返り、改善している。	達成した目標や課題を振り返り、改善している。	達成した目標や課題を振り返り、改善している。	達成した目標や課題を振り返り、改善している。	達成した目標や課題を振り返り、改善している。
学習態度	学習に取り組む姿勢がよい。	学習に取り組む姿勢がよい。	学習に取り組む姿勢がよい。	学習に取り組む姿勢がよい。	学習に取り組む姿勢がよい。
学習成果	学習の成果が顕著である。	学習の成果が顕著である。	学習の成果が顕著である。	学習の成果が顕著である。	学習の成果が顕著である。



図2 Boxへの蓄積



図3 成長プレゼン・インタビューの様子



図4 校外学習でのタブレット端末の活用

5. 研究の成果

本研究の取り組みで、G-PDCA サイクルを活用できる生徒の育成が可能なこと、その過程でのタブレット端末の有用性が明らかとなった。以下、その根拠を述べる。

(1) G-PDCA サイクル獲得

生徒・保護者アンケートや学校行事や授業、目指す自分像の作成、成長プレゼン・インタビューの実施などから G-PDCA サイクルを獲得している生徒が多いと考えられる(表3)。また、生徒が自ら「なりたい自分」を設定し、意識しながら活動に取り組むことで、ループリック表の「主体性」と「自己分析」における2回のアンケート結果から、S、A を選択した生徒の割合が増えた。つまり、継続的な取り組みが成果として表れた(表4、図5、図6)。また、「G」を意識した今年度の1学年と意識していない昨年度の1学年の結果(図7、図8)を比較すると「主体性」、「自己分析」の両項目においてS、A を選択した生徒の割合が増えている。このことから、「G」を設定する必要があると考える。

表3 成長プレゼン・インタビューのアンケート記述から

生徒アンケート結果	保護者アンケート結果
ゴールに向かって実行しようと意識を持てた。	達成、改善、目標を明確化でき、とても良い。
これからの目的が明らかになった。	自己分析により、今後を明確にしていた。
1年間を振り返り、自分の課題を発見できた。	良かった点、改善点を共有できて良かった。
自分自身を客観的にみることができた。	目標を立て、努力する姿が見えた。
成長できたことに気づくことができた。	夢に近づくために、今の自分に問う大切さを知った。
振り返ることで、将来に生かすことができた。	目指す自分になるために分析できていて感心した。

表4 「主体性」「自己分析」の項目について

主体性	S	課題を自ら見つけ、判断し、積極的に行動を起こしている。また、その行動を継続的にやっている。
	A	周囲の言動がなくても自ら考え、行動を起こし、継続している
	B	周囲の言動をきっかけに、自分なりに考え、行動を起こし、継続している。
	C	周囲の言動をきっかけに、自分なりに考え、行動を起こしている。
	D	周囲の言動があっても、行動することができていない。
自己分析力	S	他者の意見も聞きながら、自分の得意・苦手を把握・分析し、良いところをさらに伸ばし、苦手なところを改善し、努力している。
	A	自分の得意・苦手を把握・分析し、良いところをさらに伸ばし、苦手なところを改善している。
	B	自分の得意・苦手を把握し、良いところをさらに伸ばしている。
	C	自分の得意・苦手を把握している。
	D	自分の得意・苦手なところを把握できていない。

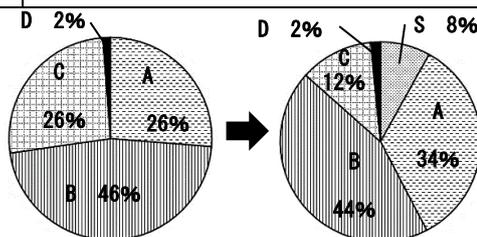


図5 「主体性」7月と1月の比較

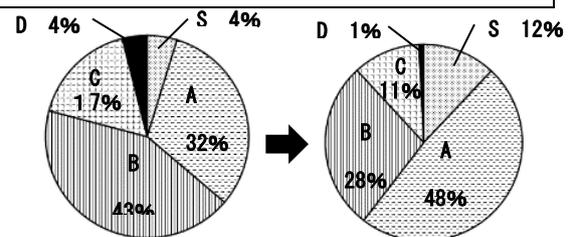


図6 「自己分析力」7月と1月の比較

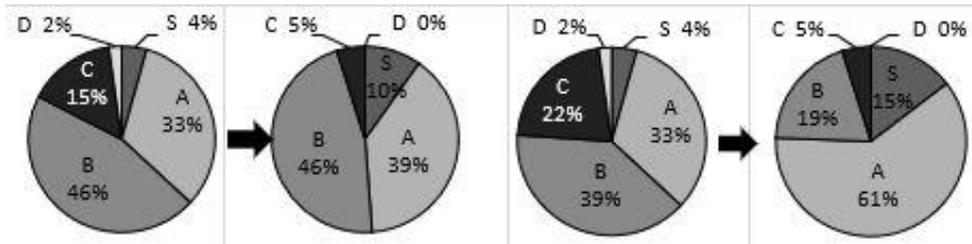


図7「主体性」前年度と今年度の比較

図8「自己分析」前年度と今年度の比較

(2) タブレット端末の有用性

生徒アンケートと教員アンケート(表5)から、タブレット端末を有効に活用できたことがわかる。また、「紙媒体とタブレット端末の蓄積では、どちらが過去の経験を振り返る上で活用しやすいか」についても、8割の生徒がタブレット端末と回答した。残り2割の生徒の記述として「タブレット端末に使い慣れていない」「手書きの方が達成感がある」などがあった。こうした生徒に対する支援は、今後の課題となった。

本研究では、一人一台タブレット端末が整備されていない状態であったが、目的は十分に達成できることが分かった。一方、その中でもタブレット端末は、多くの生徒にとって、経験の振り返りを助けるツールとして活用できる可能性を明らかにすることができた。

表5 タブレット端末の有用性に関するアンケート記述から

生徒アンケート結果	教員アンケート結果
振り返りやアンケートが蓄積できる。	学びを蓄積できる。
写真を撮って保存することができる。	動画の撮影により、動作等を客観的に確認できる。
すぐ記録でき、後から見返すことができる。	興味をもって活動に取り組むことができる。
校外学習でその場での体験をすぐに記録できる。	生徒間の回答の共有がしやすい。
振り返りたい資料がすぐに探せ、管理がしやすい。	生徒の変容がとらえやすい。

6. 今後の課題・展望

本研究の課題と展望については、主に以下の3点である。

(1) 学校活動全体で取り組むG-PDCAサイクル

今年度は、各学年ごとに担当の教員からG-PDCAサイクルについての説明を行った。しかし、G-PDCAサイクルに関するアンケート(図9)から、学年によって理解度が大きく異なる結果となった。今後は、全教員で理解し、ガイダンスを全校生一斉に行う場やG-PDCAサイクルということばを用いる場を多く設定する必要があると考える。また、G-PDCAサイクルを獲得するための取り組みを学年ごとで

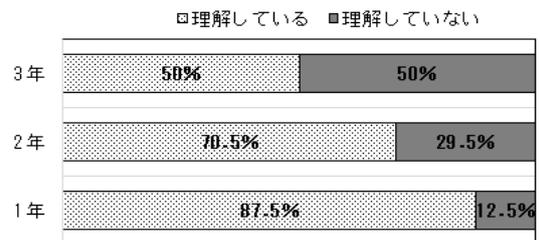


図9 G-PDCAサイクルに対する理解度

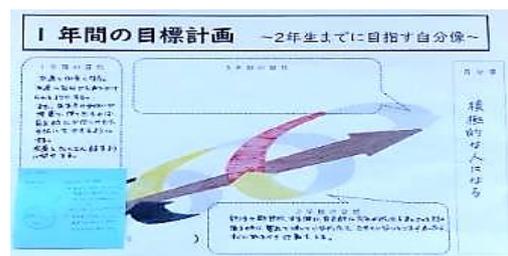


図10 なりたい自分像

はなく、共通して取り組むことも必要である。例えば、「なりたい自分像」の様式（図10）を全学年で統一し、タブレット端末内に3年間の蓄積として残すことなどがあげられる。

（2）一人一台タブレット端末導入に向けて

本研究では、40台のタブレット端末を全校生徒で使用した。そのため、学校全体で行う行事などの振り返りでは、一斉に端末を使用することができず、紙媒体の振り返りを行った。My Consul を作成するにあたり、紙媒体とタブレット端末の両方を用いなくてはいけないことが課題であった。しかし、本校では次年度から一人一台タブレット端末を導入する予定のため、これまでの紙媒体の振り返りをタブレット端末で行えるような工夫を考えていく必要がある。パワーポイントで作成したもの、エクセルで作成したもの、Classi で記入したもの、写真など、タブレット端末にも様々な種類の記録が蓄積される。これらをもとにG-PDCA サイクルを獲得し、活用するにはどのように整理していくかも今後の課題である。

（3）今後の展望

一人一台タブレット端末が導入されることで各教科や部活動等でも振り返りが可能となる。中学校3年間で「なりたい自分」を持ち、何ができて、何ができないのかを生徒一人ひとりがより把握できるようにしたい。その結果、一人ひとりの生徒が「自己実現」に近づけるよう、本研究の成果と課題を次年度の教育課程に生かしたい。

また、今後は、学校全体で教科ルーブリックの作成にも取り組み、学習面でのG-PDCA サイクルにも力を入れていきたい。

7. おわりに

日々変化する教育や生徒の姿がある中で、生徒の実態を把握するとともに、教員も生徒も、理想の生徒像（自分像）を問い続けることで「G：目的」をとらえることができると感じた。そのためには、継続したアンケート調査を行い、生徒が自己内対話できる場が必要である。また、教員自身も日々の教育活動で、G-PDCA サイクルを意識し行動することで生徒へもさらに浸透すると考える。教員は、生徒にとって身近な大人である。多忙の中で、毎年同じ繰り返しになっているのも現状としてあるなかで、時代の変化に取り残されることのないようアンテナを張っていききたい。その結果、大人として生徒のロールモデルとなれればと思う。

最後に、オンラインでの細かなサポートの場を提供くださったパナソニック教育財団の皆様、専門委員の皆様から感謝申し上げます。専門家の皆様や他校の先生方とつながり、アドバイスをいただく場は、とても貴重な機会となりました。

8. 参考文献

- ・西村多久磨，河村茂雄，櫻井茂男（2011）「自律的な学習動機づけとメタ認知的策略が学業成績を予測するプロセス—内発的な動機づけは学業成績を予測することができるのか？」『教育心理学研究』59，77-87
- ・石川和男（2018）『G-PDCA 勉強術 必ず目標達成できる方法』明日香出版社